

# 彙報

## ●關東州貌子窩遺跡發掘

最近設立された日支の東亞考古學會と東方考古學會協會との合同調査事業として第一次の考古學的遺跡發掘調査が去る四月下旬から約三週間に亘つて續行された。遺跡は關東州貌子窩管内東老灘會と碧流河會の地域に屬しその發掘地點は火神廟屯と稱する丘陵の東端とこの臺地に近接する長徑約一町の單陀子と命名された小島とを選定されたのである。此地は曩きに八木英三郎氏によりて紹介せされ、尙ほ去歲濱田耕作博士は今次の組織的發掘に先ち該地に臨み種々調査された處である。

丘陵東端臺地の遺物を包含する面積は東西約一丁南北約半町あつて臺地の西端は急傾斜をなし更らに緩漫なる丘陵地帯に連互してゐる。さればこの地の發掘は東西する約一丁の通溝を穿ち其の地盤に到達するものである。地盤の最も深きところ約十二尺に達し、發見遺物として

は多量の土器石器の外に鐵、銅器及び泉貨の數多を併存し鐵器には斧頭、銅器には鏃類、弩機、銅劍、鏃の破片泉貨には明刀、一刀、半兩、布の各種を數へ、就中土器には鬲の原始的形狀のものを多く發見した。

單陀子の發見遺物は上記臺地に見る金屬器のものを缺き土石器を主要とするものであつた。就中、土器に於ては所謂「彩色土器」の完全なるものが發見された。この土器の手法は曩きにアンダーソン氏の發見にかゝる甘肅のものとは異なり、旅順大臺山、大連濱町發見のものとは同一系統に屬し多色の幾何學的模様のものである。尙ほこの地の北西、深度約七尺に埋葬する一墓を發見し其の各墓にはや、完全なる人骨に所謂「漢式壺」を數個副葬し就中その一體の足部には玉戚に相似する通孔ある石器と頭部附近に小玉を伴存してあつた。此地の發見遺物は何れも深度七尺前後のほぼ水平面をなし、其の上部は全く自然的的作用による土具層の堆積する地層なることに於て、此地遺跡の構成後に於ける地理的變化を考證する興味あるものであつた。以上の今次の發掘は支那古代文化

研究に一大寄與をなすものであることは茲に云ふまでもない支那の金石並用時代以降少くも漢初文化に先行する幾多の興味ある問題がこの發掘により斯學者によつて近く究明されることであらう。因にこの發掘に従事した人々は日本側では東京帝國大學の原田淑人、田澤金吾、宮坂光次、京都帝國大學の濱田耕作、小牧實繁、島田貞彦諸氏の外朝鮮總督府博物館の小泉顯夫、東亞考古學會の島村孝三郎、小林胖生の諸氏があり、支那側では北京大學の陳垣、馬衡、羅庸、董光忠の諸氏であつた。

「島田」

### ● 京都帝國大學文學部國史專攻學生の

#### 大和地方研究旅行

京都帝國大學文學部國史專攻學生の春季研究旅行は文學部學友會の吉野方面旅行に引續いて室生榛原多武峯三輪の方面に試みられた。三浦教授以下一行二十一名、往復通じて四日間、割合に多忙な旅程ではあつたが、往々先き々殊に榛原町有志より與へられた多大の便宜に依り、史蹟の踏査に、古文書古美術の研究に、所期の目的を

充分に達することが出來た。今其の梗概を左に叙する。

五月十二日、午前八時十分京都驛發。大和平野を南へ磯城より飛鳥磐余の地へ進むにつれて、懐古の情を唆られる。神武帝陵前で下車して、御陵を拜し、橿原神宮に詣で、久米寺を訪れ、再び電車に乗つて、萬葉歌人の青垣山を越え行けば葉櫻薫る吉野の里。先づ藏王堂を訪ねた。本堂は康正元年の建立で數回の修繕を経た特別保護建造物であるが、佛像經篋等の國寶を藏せられる。堂の前庭なる四本櫻の處は、元弘の役に護良親王御奮戰の跡を傳へられそこに立つてゐる一基の青銅の大燈籠は國寶で「奉造立燈鑑、和州下田住大久左衛門助、奉寄進御油田七反、文明三年卯辛九月十一日、施主淨祐妙久禪尼」の銘がある。本堂と同時に建造云はれる仁王門を抜けて、阪路を下るこみ數町、吉水神社に詣で、所藏の古文書を見た。後村上天皇正平六年十二月二十九日吉水大夫僧都宗信に賜つた安堵の繪旨を始めとして、正平八年六月二十八日、同十二月三日の繪旨、及び尊壽丸に賜つた元中七年九月二十九日、同十月三日、同九年八月十八

日、同九月二十日、同十月二十六日、最後に明徳四年三月二日のもの等皆所領安堵の繪旨であつて、宗信父子に對する南朝三代の御信賴の如何に厚かつたか、窺はれる時代が下つて天正十一年十二月秀吉朱印の禁制、慶長十九年霜月十九日の徳川幕府の禁制もあつた。こゝを辭して如意輪寺に詣で、塔尾御陵を拜して後、小徑の急坂を辿るこゝ數町にして水分神社へ詣でた。此の社殿は中央の春日造、兩翼の流造を一つの屋根で結附けてゐるのが珍しい。一行の訪ねた時は恰も修理中であつたが、偶出張中の松本奈良縣技手の好意に依つて取外されて居た、慶長拾年乙巳九月二十八日、内大臣豊臣秀頼卿再興、法隆寺御大工藤右衛門尉秀次藤原朝臣、袖方當郷寺戸久住與五郎、塗師六左衛門宗忠甚三家次の銘ある棟札や墓股の一つに「和州南都北室繪師彌五郎書之也」の銘のあるもの杯を見るこゝが出来て、之に依て造營の年代も、其の事を擔當した技術家を確められたのは、幸慶であつた。猶ほ延寶七年八月、寶曆二年極月、文政十一年五月修理したこゝを記した棟札もあり、殊に享保十三年の修理の

時には遷宮が行はれ、十一月二十二日に修理の完成したこゝが窺はれる。同社の柱の金具は菊花ミ唐草ミの浮模様で、中殿のものは唐草に代へるに菊葉を以てしてゐる。何れも雅致ある様式ミ自由な刀法の跡は決して凡手でないが、其銘に大坂理齋ミあるのを見て、一行は圖らずも茲に隠れた斯道の名手を知り得たこゝを欣んだ。之より阪路を下つて竹林院を訪れ、芳雲閣に着いた。

十三日、前日見残した元櫻本坊、吉野皇居趾等を見、引返して村上義光の墓を弔し、吉野神宮を拜し、途すがら南山攻守の地勢を案じ乍ら吉野驛に着いた。こゝより櫻井を経て初瀬着、長谷觀音を訪ねて堂舎ミ寶物ミを觀覽した後一行は直に室生へ向つた。室生川の谿流に沿うて機林の中を自動車で走るこゝ時餘にして、幽邃閑寂な室生の淨境に着いた。庫裡に入る門に女人高野ミ掲げられた通り、地勢ミ云ひ殿堂ミ云ひ、總てが小規模で而も優雅である。其の伽藍の配置は奈良の平地佛敎のそれミ異つて、整齊ではないが自由な中に纏つた調和を感ぜしめる。彌勒堂は鎌倉時代に建造された入母屋の小建築、

中央の厨子に弘仁期の作を云はれる彌勒像を安置する。刀法極めて鮮かに、簡朴崇高な氣品を表はし、光背の透彫も精妙であつて、支那傳來のものかとも云はれる。本尊の向て右方に傳春日佛師作の釋迦座像がある。元の白色顔料は大分割落してゐるが形體の比例、肉附を衣紋の工合はよく調和してゐる。衣紋の褶は所謂翻波式にするもので鋭い其刀法が豐滿な像に靜爽な表現を與へる次に金堂へ行く。前者よりは稍大きく、徳川時代前面に禮拜堂を付け加へた爲めに元の入母屋造が變形してゐるが格好よく優美な弘仁以後の建築の特徴を表はしてゐる内部中央佛壇上に弘仁期の作の本尊藥師像を中に脇立及び十二神像を安置する。本尊藥師像は從來釋迦と誤傳へられたものであつて其の衣紋が細鋭で而も深いが流麗で全體に温潤の感を失はぬ。本尊後方の板壁に描れた帝釋天曼陀羅は可なり剥落してはゐるがまた構圖なり著色なりが認められ、そこには所謂大和繪の畫風があらはれてゐる。更に石階を上るに灌頂堂である。諸堂中最大で鎌倉時代のもの、内部は内外二陣に仕切られ、天井は小

組格天井である。内陣中央には日本三如意輪の一と云はれる如意輪觀音像が安置されて居て、其の豐麗な風貌には犯し難い莊重味を湛へてゐる。灌頂堂の直上後方に五重塔があつて、弘仁期を代表する唯一の建築物と云はれ高さ五丈三尺、(塔身三丈八尺、相輪十五尺)、色彩も形體も凡て輕快優美な其姿態が背景をなす老杉の鬱林の重々しさで調和して快き安定感を與へる。頂上の水煙は無く、その代に寶瓶と寶蓋を以てしてゐることは他に比類のない特徴である。此の割合に狭い地域で弘仁初期から鎌倉後期までの建物を一目對比して觀賞出来るのは、有難い眼福であつた。一行は名残を惜みつゝ再び車上の人となり、十五分許で大野寺に着いた。宇陀川に室生川の合流點、屏風ヶ浦の碧淵を隔てて露出した懸崖の壁面に筋彫にされた丈五丈四寸の大石佛は意外の感激を與へた。之は後鳥羽上皇の勸願に依て承元元年十月より翌二年十月迄一箇年の日子を費して成つたもの、少しく右に横向になつた顔の線の如何にも豊かな膨み、全體の容姿の柔かさは莊嚴と云ふよりも慈愛に満ちた相である。住

持の好意に依て最近取られた其の柘本を見今更に意匠の雄大に驚く。時已に薄暮、赤人の故郷山邊郷は彼處、神武討賊の墨坂は此處と指顧しつゝ榛原町に着いた。(ぬ)

十四日、氣遣はれた夜來の雨も今朝は朗らかに霽れて居た。朝九時頃宿舎を出て宇陀郡高等女學校長山田梅吉氏等の東道で先づ鳥見靈時傳説地鳥見山に向つた。途上墨坂の畔に立つては神武創業の跡を鴉立、假屋敷、膳部屋等の地名に絡る古傳説に偲び、紫地藏、天神森を路側に指顧しつゝ漸く鳥見の中腹鳥見池畔に達した。こゝは今鳥見靈時の遺蹟といはるゝ一部で土壇址と稱せらるゝものは夏草に深く埋もれて僅にその形狀をさめて居るにすぎない。古老の談によるミ鳥見池畔天神神社を繞つて管ては圓陣狀に自然石の配列が存して居たミ云ふ恐らく是は後に擧げる丹生神社境内のものミ同一構造のものであつたらう。此遺蹟は現在の古代文献乃至考古學の研究範圍では明確な斷定を與へ難いにもせよ、榛原町有志諸氏が郷土愛から顯彰會を組織して、其保存表彰に努力せられるこゝに對しては敬意を表せざるを得ない。山上に

少憩して後山を下り更に天神畑の靈時傳説遺蹟を訪ひ、菅生善兵衛氏宅に至つて其の蒐集品を見る。永祿二年般若寺收納帳、元祿取調の山陵圖、延享四年より寶曆十二年までの朝鮮人來朝記、血判のある長州征伐記、柳澤淇園の書入ある古瓦卷物、碧玉製鐵形石破片二個、碧玉製車輪石一個、牙狀滑石製品一個、鏡鑑二面が先づ注目された。就中牙狀滑石製品は長一寸八分僅に彎曲を有し一端に孔を穿ち、形圓柱型をなし、兩面の下方部に各一條の溝を有する。装身の意味の懸垂物であらう。鏡鑑一面は和鏡、即ち鳳凰瑞雲八稜鏡で徑五寸二分、緣厚三分、藤原時代の製作に屬するものミ考へる。寶曆二年十一月上榛原天神畑に於て發掘したミ傳へられる他の一面は天神森發見の漢式麗龍鏡で全形の三分一を損失して居るが鏡面の光澤美麗且つ手法に於てよく時代の特色を表現して居るもので、徑四寸六分、緣厚一分五厘を測り得る。三時頃自動車に投じて兩師の丹生神社に至り、荒神石、神樂石と稱するものを踏査した。これは神社社殿を中心としてその周圍に稍瓢狀をなして圍繞する自然石の配列で

石の現存するもの約二十餘個、その東北隅に位置する龍池を圍んで更に約九個の自然石が小圓を描いて配列して居る。今是をかの神籠石の構造と比較するにその構造様式に於て兩者の間に著しき相違があるからこの自然石環狀配列を以て直ちに神籠石と同一意義に解するは稍不穩當かと思はれた。猶ほ附近の甕田からは祝部土器を發掘し歸途參拜した墨坂神社境内からも嘗て社殿改築の際碧玉、小玉、小曲玉等を發見したと傳へられる。終に附記したいのは町の東北八重雲稻荷附近の田畑から往々石鏃類を發見するに於て、これは石器時代住民の既にこの地に一勢力を持して居たことを語る唯一の資料であらう〔を〕

十五日、午前七時榛原出發、雨をおかして自動車で一氣に多武峰へミ走らす。八時過ぎ談山神社に着いて、同社所藏の古文書を見た。有名な談山御破裂に關するものでは、其平癒の爲め勅使が差遣され、之が接待其他の諸費用を誌した明應七年十二月二十日附の文書があつた。七十五文浦六合、四十文菟蕪十丁、二百文薪代等、當時の物

價乃至奈良を中心とした經濟の一面をも窺ふことが出来る。猶ほ明應六年十月十二日の御破裂奉加錢に關するものには別に棟樑帳が附いて居つて、上中下の等級に別つて徵集したことが解る。造營に關するものとしては、文正五年三月二十八日上人永胤以下四人の連署してゐる一山再興に關する決議文が注意を惹いた。所領に關するものでは、攝州鶴殿の關錢納日記は注目すべく、文安二年八月より翌三年七月まで關錢總額二十六貫文、中八月一日は一貫十三文十月二十六日は僅に五十文、霜月十五日は無しと云ふ有様で、季節による通行の繁閑をも察せしめる。併し最も興味を惹いたのは、寛正六年七月日の社内の規約二十四箇條を記したものであつて、參拜に關するに於て問題の發生した場合は寺内の衆議に依り而も多數決で取決めること云ふこと、法師にあるまじき風装その他行動のあつた時は追放に處すること、他所から參向の參拜人に對しては門番に至るまで惡口その他の無禮あるべからずと云ふこと杯が規定されてゐる。又一通の被官契約狀には道隆なるものが其の子なる兄弟三人を先に文

珠院に借金の抵當に入れたのが已に質流になつて居たのを永正十五年正月十九日、領内居住の間は墓守にするに云ふ條件で請出したこゝが記される。當時民間に行はれた人身質入賣質の慣習に、兼ねて被官其者の性質を考へるには恰好の資料と思はれた。十時多武峰を出で十時半三輪着、大神神社に参拜し高橋宮司の説明を聞いた。此の神社は三輪山を本體とするのであつて別に神殿を設けない。拜殿は寛文三年の建造であるが、桃山式建築の跡を留めてゐる所が特殊なものとして特別保護建造物となつて居る。拜殿より神體山を仰ぐところ、前面に當社

特有の鳥居が立ち、それを超えて寶庫がある。本居翁が之を以て神殿と名したのは神殿を別に寶殿とも云ふ所から誤つたものであらうとの事である。勅使殿に陳列された寶物を觀た。文政十三年十一月中川春瀾作三輪神體山繪圖、大小二個の盾、其大なるものには嘉元三年巳卯月

一日の銘があり、儀仗用のものに見える。三輪寺塔佛口用文明十六年甲辰奉行良海觀進道觀の銘や、三輪寺大工彫部允應永十九年壬辰五月日の銘のある巴瓦。應永二十一年

の銘ある手洗鉢。延元三年五月日の銘ある木製高杯。及び無銘の三輪升一個等が重なるものである。本社に隣して、古事記に云ふ意富多多泥古、即ち第一代の神主を祀られてゐる若宮社に詣でた。社殿は鎌倉時代弘安八年の建造と傳へられ亦特別保護建造物である。鬱蒼とした老杉の間に幽玄の靈氣の漂ふが如く、怪しき傳説を秘めた神體山を仰ぎ低回顧望しながら、十一時三十五分發で三輪を立ち午後二時三十一分一行恙なく京都に着いて解散した。(ぬ)

#### ●帝國學士院授賞式

帝國學士院は去る五月二十日同院に於て授賞式を行ひたるが其の内、史學に關する受賞者左の如し。

#### 恩賜賞

唐宋時代に於ける金銀の研究 文學博士 加藤 繁

#### ●京都帝國大學文學部史學科本學年

#### 講義題目

國史概説

毎週二

黎明期の近世文明

二

社會及産業組織(演習)

一 三浦教授

東洋史演習

一

史料解題及講讀

支那中古の文化

二 内藤講師

國史概説

西洋史概説(800-1648, A. D.)

古代の文化

一 西田教授

獨逸史學史(前學年の續)

二

經濟生活の發達(演習)

ヘリクレス時代(演習)

二

史學研究法(史學概論理論及應用)

Thucydides, History of Peloponnesian War.

朝鮮史の特殊問題(第一學期)

G. Lambeck, Quellensammlung

坂口教授

朝鮮史籍解題及講讀(第一學期)

(Penkles, etc.)

五

古代史の特殊問題(第二學期)

一 今西教授

Riess, Englische Geschichte, hauptsächlich in neuester Zeit 1926.

二

明治維新史(第二學期)

一 喜田講師

西洋史講讀

二

古文書學概説

二 藤井講師

西洋史概説(最近世)

二

東洋史概説

二 桑原教授

中世都市の發達及其生活

二

唐律を中心とする支那の法律

二 矢野教授

獨逸中世史の諸問題(演習)

二

近世の日支露關係

二 羽田教授

Bryce, The Holy Roman Empire.

二

東洋史演習

二 植村助教

G. Lambeck, Quellensammlung.

二

東洋史講讀

二 中村善講師

一九〇五年以後の最近世史(第二學期)

二

東洋史概説

二

中村善講師

二

西域史

二

中村善講師

二



人文地理學概説

經濟地理學特論

日本地理演習

自然地理學概説

東亞地貌概説

地質學總論(理學部講義四月—十一月)

地史學(理學部講義 十二月—三月)

新石器時代以後の地形と人類

地理學實習

考古學概説

東西古代土器の比較研究

考古學演習及實習

支那漢唐時代の文化(第二學期)

日本美術史概論(哲學科講義)

地理學講讀及實習

Groll, Kartenkunde.

地圖學及測量(理學部講義、第一學期)

人類學(一學期間)

氣象學(理學部講義、一學期間)

教育思想概説

●昭和二年卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける本年史學科卒業論文の題

目左の如し(△印選科生)

國史學專攻

我國資本主義の發展

元祿時代を中心として見たる町人階級の

隆起に就きて

塵芥集の研究

上代牧馬考

徳川時代に於ける農民階級の一方面に就て

近世に於ける復古的精神の發達

徳川時代以前に於ける日本水軍の一考察△塚田忠泰

東洋史學專攻

南北朝時代に於ける道佛二教の衝突に就きて

宋代に於ける饑饉救濟策

會我部靜雄

二 滑川講師

二 小西教授

二 石橋教授

二 小川教授

三 中村新教授

二 小牧講師

二 濱田教授

二 原田講師

二 澤村助教

二 小野講師

二 山根講師

二 金關助教

二 河野 義宣

二 曾我部靜雄

髮賊の起原並其革命主義

荒川萬壽夫

漢屯田考

鹽谷 鴻

漢唐北宋時代に於ける對塞外種族政策

間處 武夫

漢代の漆器に就いて

△水野 清一

西洋史學專攻

シュタイン (Freiherr von Stein) の改革に就いて

井上 五七

七月王國に於ける支配階級と外交政策 猪谷 文臣

拾八世紀の愛蘭(主としてグラタンの議會に就いて)

原 弘二郎

回教建築特にアルハンブラに回教文明 大館 宗憲

プロシヤ國王フレデリック二世の對外政策

岡本 基

十九世紀末に於ける獨逸世界政策と對英關係

竹村 越三

原始基督教と羅馬帝國との關係

上里 朝秀

セシロローヅ南亞經營の眞想を論ず

藪田 三郎

十三世紀に於ける修道院運動に就いて佐藤寅佐武朗

Akhmatov, and His Religious Revolution.

岡島誠太郎

ノルマン征服前後の英國治政組織

△大石 潔

最近世史專攻

アメリカ合衆國の世界的強國としての地位の確立

(ルーズベルトのバナマ運河建設及び日露講和の調停) 森 瑞樹

地理學專攻

琵琶湖々域の變遷と湖岸住民の生活

廣瀬 淨慧

◎京都帝國大學第十八回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲め例年の如く來る八月一日より夏期講演會を開催して一般有志の聽講を許すといふ、講演科目中、史學地理學に關係あるもの左の如し、

(詳細は京都帝國大學本部に照合すべし)

ルネーサンス史概説(幻燈使用)

文學部教授 坂口 昂君

平安朝繪畫の史的考察 文學部助教 澤村專太郎君

地球の天文學 理學部教授 山本 一清君

科外講演

都邑の種類(幻燈使用) 文學部教授 石橋 五郎君

● 史學研究會

例會 六月十一日午後一時より京都帝國大學樂友會館大

講演室に於て開催、左の兩氏の講演があつた。

明治大正時代に於ける基督教 法學士 山谷省吾君

新文化醜態時代たる明治初年に初めて布教を公許され

た基督教就中カルヴィンの流を汲む英米のプロテスタン  
チズムの人々は日本在來の文化に伍し又は同じく輸入さ

れた物質的功利主義に對抗して熱心に傳道に努めその結  
果歐洲の十七、八世紀の夫にも比すべき明治廿年以後の

啓蒙的文化運動或は自由思想を導き基督教をしてよく明  
治時代に於ける文化の一つの指導的地位を得せしめた之

外人宣教師及び熱意を學才に富む初代の信者達の努力  
によるのである。然るに大正時代に入つては西洋文明の

根本的輸入諸學問の獨立等の爲め基督教は全くその地位  
を失ひ人々は教會を佛寺同様に冷視するに至つた。云々

百姓一揆の頻發性 經濟學士 黒正 巖君

百姓一揆は被支配階級たる農民が支配階級たる武士

に對し何等かの利益を主張する團體運動即ち徒黨の意味  
である。之は一は地理的に反復性あり二は時間的に或る

時期に繼續して起る性質がある。先づ後者に就て云へば  
徳川時代には元祿十三年を中心として明かなタイプに分

つ事が出来る。其年以前は起り方が斷續的で事件が割合  
に少かつたが後期には頻繁に起つた。前期に少かつたの

は家康が天下を一統し百姓が大體安堵したから餘程特殊  
な事情がない限り起らなかつたけれども元祿の貨幣改鑄

以來武士階級の破綻を暴露し、夫よりはリズムを持つて  
頻繁に起つた。此間を六期に分へ事が出来る。夫が起る

のは米價と大なる關係がある。次に地理的反復性に就て  
云へば南海道が最も多く九州は最も少い。云々

講演終つて別室に於て茶話會を催し文學士岡島誠太郎  
君の「最近將來されたコプロト文書に就いて」(標本供覽)。

島田貞彦君の「最近發掘された南滿洲貔子窩遺跡の概觀」  
(寫真供覽)其他會員の有益なる談話があつて六時三十分

閉會した。

## ● 讀史會

々

例會 三月十七日卒業論文口頭試問終了の日午後六時半

より卒業生送別會を兼ねて樂友會館五號室にて開會左記  
二君の發表があつて後三浦西田兩教授より各論文の批評  
及び國史界の一般傾向について感想談があり、猶ほ牧學  
士も自己卒業當時の經驗について述べられた。最後に滿  
洲撫順中學校長として近く赴任の筈なる後藤學士の爲め  
に送別の意を表し十時散會した。

徳川氏以前における日本水軍の一考察

塚田 忠泰君

日本水軍史上倭寇は陸上に勝つても海上には常に敗れ  
てゐるのを見ても海戰に拙かつたことが知れる。秀吉朝  
鮮役の際も同様水軍は多く破れた。この水軍不振の理由  
としては造船術の幼稚、船の構造の海戰に不適當であつ  
た事、陸戰を主とし海戰を従とする思想、使用武器の不利  
と一騎打を好む戰術等に求むべく、又海よりは陸 尊ん  
だ支那思想の影響も水軍の發達を阻害し外國の侵略の短  
期に止つた事も一つの理由として擧ぐべきであらう。云

元祿時代を中心とせる町人階級の隆起につきて

山下 恒男君

先づ町人階級の地位とその經濟を論じ都市經濟の起  
つた有様を見、貨幣制度が町人階級に有利な結果を齎ら  
し政治的には武士の壓迫を受けつゝも社會的に支配力を  
得たことを論じ、次に當時勃興した民衆藝術が自らの階  
級を描いた事を見、その精神力の強さに言及した。

例會 四月二十八日午後六時半より樂友會館第五號室に

於て開催。三浦西田兩教授以下三十三名參會、次の如き  
講演があつて十時散會した。

小田 淳君

足利時代に於ける貨幣流通に就て  
足利時代外來の銅錢は社會に完全な充足を與へるを得  
ず絹布米等に依つて補充されたが經濟界の發達は必然的  
に金銀貨の流通を要求したと、先づ砂金が初め贈答に  
用ひられ足利末季に至つて銀と共に均量貨幣として一般  
に使用されるに至つた。金は銀より遅れて使用されたが  
天文頃より漸く一般に流通し信長秀吉頃に至り其の事實

顯著になり判金の出現を見るに至つたけれども本位貨幣は銅錢であつた云々。

徳政一揆に就て

牧野信之助君

徳政一揆の起源に關して一の假説を提出したいとて、先づ馬借一揆土一揆、徳政一揆を明確に識別すべきを説き、純粹に徳政を目的とした土一揆の初て起つたのは從來の説では正長元年九月となるのであるが、朽木文書に據るに應永十一年二月の日附ある賣券に已に此頃土一揆のあつたことを徴證すべきものがあることなし、而て初て起つた地點は近江殊に阪本であること其の理由を説く所があつた。

安南暹羅貿易の一考察

文學博士 三浦周行君

鎖國以前の安南貿易について安南には我貿易家の渡航印信を受けて渡航したものが多く別して廣南港には商船がよく出入したから日本人の居留地も設けられ鎖國後迄留つてゐたものがあつて近江八幡町日牟禮八幡宮に繪額を納めた西村太郎右衛門尉も其一人なることから長崎記に見える延寶年間廣南に留つてゐた邦人男四人の中の一

人なる具足屋次兵衛は安南東海岸フエイフー附近の墓地に墓を残してゐる文賢具足君と思はるゝもので、當年の堺の貿易家であつたことを明にし、子孫は鎖國になつて歸國することが出来なくなつたものであらうといはれ次に暹羅貿易に及んでその日本町にも一時多數の我居留民があつて鎖國後も男九人が記録されてゐるが、堺市正法寺所藏の釋迦降魔成道圖は其の裏書に據つてそれにも洩れた中村彦左衛門なるものが暹羅より本國の母が萬治二年に物故したことを聞いて二親追善の爲めに同寺の塔頭蔡華庵に寄進し來つたものなること鎖國以後も是等の地方との通信に依つて内地の親族との間に消息を通じ贈與の行はれてゐた一つの實例たることをそれらの寫真を示し乍ら説明された。

**例會** 五月二十八日午後六時半より樂友會館、第五號室にて開會。三浦教授、黒正教授以下三十九名來會。十時半散會。講演次の如し。

徳川幕府の儉約令

文學士 肥後和男君

幕府儉約の精神は家康の意志に發して所謂祖法として

傳承されたものであり、代々の法度に其の規定がある。

併し其の實施及び效果は時勢の變遷と共に沿革があつた。そして其の次第を述べ、儉約令の主目的は幕府自體及旗本の救済にあつたこと、其等の困窮を米經濟を基礎とした武士階級に對する金錢經濟を主とする町人階級の壓迫に因るこいひ、又此の令の特色は武士をして分を維持せしめることを目的としたこと、日常の些末事にも及ぼした幕府の干涉主義、新規を禁ずる保守的傾向にある。

云々

大和繪發達史上に於ける鳳凰堂壁畫 源 豊宗君

大和繪の名稱は室町以前は畫題に用ゐられたが畫風そのものに依て稱せられるに至つたのは戰國初期であり、此畫風の完成は保元前後の人隆能の源氏物語繪卷に於て見られる。鳥羽僧正の志貴山縁起繪卷も其頃の作で大和繪完成期を表象するものであるとして大和繪畫風の特色を細説し、鳳凰堂の壁畫は馬の描方等に尙ほ漢畫の風の残れるものがあるが、其山川人物樹華家屋の描法には充分後に發達する大和繪の要素が出てゐるこいつて元畫の

摸寫に就て詳細に説明し、多數の寫真によつて之を證明した。

### ●支那學會

大會 五月二十九日午後一時半より、學生集會所階上に

於いて開催、來會者約百五十名。その中會員は四十二名左の三氏の講演の終つて後晚餐會を催し、九時に散會す

一、山梨稻川略歴 文學博士 新村 出君

山梨稻川の閱歷をのべ、その思想の上と同郷の人、眞淵、白隱の及ぼせる影響の些少なからざることを述べらる

一、山梨稻川の小學 文學博士 内藤虎次郎君

稻川は宣長の日本音韻研究に啓發(?)されて、支那音韻の發達を研究するに至つた。四庫全書簡目録に顧亭林的説を非せざるを、稻川は駁した。之は決して稻川が顧氏の説をそのまゝ繼承せる譯ではなく、それを批判しうるだけの見界と學識を具へてゐた爲である。稻川の音韻研究は頗る組織的で近世日本の學問の最高レベルを示すものである。云々

一、伊藤蘭嶋について 文學博士 狩野直喜君

蘭嶋は仁齋の第五子で兄東涯と共に首尾藏と稱せらるゝ人であり、その學問は學庸よりも論孟を重要視するのである。蘭嶋は經書の年代を考證し、經書その他に新解釋を施し、その方法には賞揚に價するもの多し。云々

尙當日會場には蘭嶋及稻川の關係資料を陳列した。今その出品目録を掲げる。

山梨稻川關係資料

- 一、交緯 鈔本 四册 湯淺廉孫君藏
- 二、文緯附補闕跋文 鈔本 三二册 京都帝國大學圖書館藏
- 三、古音律呂三類 鈔本 二册 同
- 四、古聲譜 鈔本 一册 同
- 五、考聲徵 鈔本 三册 同
- 六、口聲圖 鈔本 二册 同
- 七、孟浪俚言 鈔本 一册 同
- 八、稻川詩艸 刊本 五册 同
- 九、手稿 一册 内藤虎次郎君藏
- 一〇、同 一巻 同
- 一一、稻川遺芳 刊本 一册 同

伊藤蘭嶋關係資料

- 一、周易靈章 稿本 一册 古義堂藏
  - 二、易憲章 稿本 四册 同
  - 三、易本旨 稿本 五册 久原文庫藏
  - 四、文言繫辭解 稿本 一册 同
  - 五、詩書序 稿本初稿一册 古義堂藏
  - 六、書詩序 金藤諭附稿本第三稿 一册 同
  - 七、詩書序 金藤解題附稿本 一册 同
  - 八、書反正 稿本 一册 同
  - 九、同 刊本 二册 同
  - 一〇、同 稿本 四册 同
  - 一一、同 稿本 四册 久原文庫藏
  - 一二、詩經集異序 稿本 一册 古義堂藏
- 一、二、詩文押韻策 最上徳内撰 刊本 一册 湯淺廉孫君藏
- 一三、重刊說文解字五音韻譜 夏川玄朴撰 許氏說文解字五音韻譜 山梨治憲校正 鈔本 十二册 京大圖書館藏
- 一四、募銘 松崎謙堂撰 狩谷披齋書 拓本 一份 内藤虎次郎君藏
- 一五、稻川先生記念錄 一册 一册

一三、詩古言序	稿本第二稿一册	同	三二、同	一册	同
一四、詩古言序說	稿本 一册	同	三三、同	一册	同
一五、詩古言	稿本 一册	同	三四、同	一册	同
一六、詩經古言	稿本 一三册	同	三五、同	一册	高瀬武次郎君藏
一七、詩古言	稿本 八册	久原文庫藏	三六、同	一册	平野保三郎君藏
一八、讀題記	稿本 一册	古義堂藏	三七、同	一册	武林君藏
一九、同	稿本 一册	同	三八、同	五份	古義堂藏
二〇、同	稿本 一册	久原文庫藏	三九、同	一册	同
二一、春秋聖旨	稿本 三册	古義堂藏			
二二、同	稿本 三册	久原文庫藏			
二三、論語首章國字解殘稿	一份	古義堂藏			
二四、孟子私說	稿本 一册	清水默次郎君藏			
二五、一得錄蘭圃子亦蘭訂鈔本	一册	同			
二六、紹衣稿 附紹衣稿目	稿本 六册	古義堂藏			
二七、紹衣稿鈔	刊本 一册				
二八、舊鈔論語集解	蘭圃手跋 四册	狩野直喜君藏			
二九、歐陽文忠公集	仁齋東涯蘭圃手澤本 八册	某君藏			
三〇、南豐類藁	蘭圃手澤本 十二册	同			
三一、遺墨	一卷	古義堂藏			

●西洋史讀書會

例會 去四月二十六日新會員の歓迎及び九州帝國大學に赴任さるゝ大村學士の送別の意を兼ねて、本學年度第一回例會を樂友會館で開いた。坂口教授植村助教授大村學士以下十九名出席、晚餐後左の紹介があつた。

ルツターの文化史上の位置 平井 謙二君

Hannack の Roden und Aufsätze 中の Vortrage über

Martin Luther によりルツターが宗教上は勿論であるが學術上にも間接的に大貢獻をした事を説いた。

例會 五月二十八日、樂友會館に於て開催、坂口教授以



下十八名出席、左の三君の紹介があつた。

Invasion of Belgium

稻葉 常楠君

歐洲大戰に於ける獨逸の白耳義侵入は獨逸の當然なる自由であつたから、Bethmann-Hollweg (Reflections of the World war) の主張を紹介した。

羅馬の地方課税

巖根 智昭君

共和政時代帝政前期及び後期に分ち羅馬の地方税制の狀態の變化を述べた。W. T. Arnold; Roman Provincial Administration 中の一節の紹介である。

十九世紀初頭の英國民衆の自由

八木 正治君

Elie Halevy; History of the English People in 1815 に據つて貴族的傾向の尙濃厚であつた當時の英國に於て反抗權請願權集會權出版權等の行使が民衆の自由を護つた事を説明した。

會 報

●寄贈交換圖書

武家時代の研究 一卷

大森金五郎著

氏族制時代の神社祭祀

植木直一郎著

白山記攷證

白山比咩神社叢書第一輯

商業と經濟 第七年第二册

長崎高等商業學校研究館

人類學雜誌 四二の二、三、四

東京人類學會

經濟論叢 二四の四、五

京大經濟學會

伊豫史壇 四八、四九、

伊豫史談會

歴史地理 四九の四、五

日本學術普及會

民族 二の三

民族發行所

中央史壇 一三の四、五

國史講習會

國學院雜誌 三三の四、五

國學院大學

史學雜誌 三八の四、五

史 學 會

佛敎研究 八の二

大谷大學佛敎研究會

龍谷大學論叢 一三三

龍谷大學論叢社

考古學雜誌 一七の四、五 考古學會

●會員 動靜

●入 會

東京市麴町區富士見町一丁目卅六 三井 高陽氏

(右紹介者 遠藤佐々喜氏)

京都市上京區岡崎黒谷一番地、田中方 藤原 義一氏

(右紹介者 天沼俊一氏)

山口縣岩國中學校 蜂須賀熊園氏

(右紹介者 橋川 正氏)

富山縣射水中學校 佐久 高士氏

(右紹介者 栗田元次氏)

大阪市東成區生野高等女學校 森脇 讓氏

(右紹介者 伊藤堯超氏)

長野縣上田市車坂 猪坂 直一氏

(右紹介者 可兒虎夫氏)

大阪市西淀川區大仁町一〇九、鍛野方 近藤 岸雄氏

(右紹介者 新町德之氏)

京都帝國大學文學部史學科 宮崎 武夫氏

平澤良之助氏

藪田 三郎氏

高橋 金也氏

山本 林氏

伊藤 只人氏

石野國太郎氏

池田 修二氏

石垣 亮吉氏

藤井 駿氏

船津 勝雄氏

藤田 至善氏

佐々木信三郎氏

佐知 弘文氏

和田 捷雄氏

大熊 立治氏

金子 武雄氏

吉川 清一氏

武藤 誠氏

同

同

同

同

同

同

同

同

龍谷大學

(右紹介者 島田貞彦氏)

京都市上京區紫野御所田町二七、安達方

同

(右紹介者 那波利貞氏)

大阪府中河内郡大戸村大字石切

東京市麻布區櫻田町

(右紹介者 三浦周行氏)

退會

杉村勇次郎氏 樋口龍太郎氏 近藤ひで氏

向井 淳郎氏

神戸 收介氏

腹巻 量平氏

鍋島 直康氏

下川 秀樹氏

井上 智男氏

森田 鐵次氏

池内 義資氏

濱中 寛淳氏

劉 俊 彦氏

小川 義雄氏

木積 一雄氏

小松 綠氏

逝 去

藤代禎輔氏

右謹みて哀悼の意を表す